



はじめに

静岡県教育研究会（以下静教研と記述）教育研究検討委員会は、教育を取り巻く諸状況を踏まえて、研究の基本テーマなどについて幅広く協議し、今後の方向を見定め、以下のように提言する。

I 基本テーマについて

意見	見解	提言
<p>(1) 継続する。 ア 定着・浸透してきた。 イ 自己実現、自立、生きる力等がイメージできる。 ウ メッセージ性、インパクトがある。</p> <p>(2) 変更する。 ア 学習指導要領、県教育振興計画等との整合性を図る。 イ テーマが抽象的である。 ウ 10年が経過した。 エ 「ひと・もの・こと」へのかかわりを入れたい。 オ 「ときめき」は斬新であり、生かしたい。</p>	<p>(1) 現行の基本テーマは、「生きる力」を育てるために、人間としての必要な資質とは何かを探る中で、「子どもに意欲を育て、子どものときめきを大切に、子どもにころごしをもたせること」となり、「意欲 ときめき ころごし」が生まれた。</p> <p>(2) 現テーマ継続の意見があるが、社会の変化の激しいこと、現テーマが10年経過したこと、新学習指導要領が実施されたこと等からテーマを変更し、新たな出発を図ることが望ましいと判断し、見直すこととした。</p> <p>(3) 現テーマには、抽象的等の意見がある一方、親しみやすい、静教研らしさがある、テーマとして覚えやすいといった意見が多いことを受け、今まで同様に、合い言葉的なものが適切と判断した。そこで、現テーマの斬新さを引き継ぎ、現代社会や学校が抱える課題、学校で目指す子どもの姿を検討し、さらには新鮮さがあり、会員にとって愛着の湧くものは何かを探った。</p> <p>(4) ・夢、希望、躍動といった明るいイメージであること ・「ひと・もの・こと」とかかわること ・未来に向かって生きる力をはぐくむ教育を推進すること これらを願い、新基本テーマを設定したい。</p>	<p>● 変更する。</p> <p>(1) 現行の3語のリズム感を生かして、今一番大切にしたいものを協議し、新基本テーマを「ときめき かかわり 未来へつなぐ」とした。</p> <p>(2) 「ときめき」とは、「学びの入り口」の「ときめき」だけでなく、「分かった、できた喜び」、さらには「次への意欲」を含めたものと押さえた。</p> <p>(3) 「ひと・もの・こと」と進んでかかわり、自分のよさに気づき、伸びを実感できる子どもを育てたいと考え、「かかわり」とした。</p> <p>(4) 夢や希望をもって、自ら学び続ける子どもを育てたいと考え、「未来へつなぐ」とした。</p> <p>*詳細は、「新基本テーマのリーフレット」を参考にする。</p>

II 研究大会について

1 研究大会の開催

意見	見解	提言
<p>(1) 例年どおり毎年開催する。</p> <p>(2) 隔年開催する。 ア 発表と紙上発表を隔年で開催する。 イ 教科と領域を隔年で開催する。</p> <p>(3) その他 ア 開催は部に任せる。 イ 3日間開催する。 ウ 教科と領域の開催日等を調整する。 エ 大会会場は交通の便のよい市町とし、準備・運営は担当地域が受け持つ。 オ 儀式的なものは簡素化する。</p>	<p>(1) 静教研は会員の会費で成り立っている自主的な研究組織であり、研究大会（以下大会と記述）を楽しみにしている会員が多い。大会が隔年開催となった場合、大会を開催しない研究部に会員が集まるか危惧する。また、開催しない部の会員への配慮も必要である。</p> <p>(2) 大会の開催基準日は前年度に県教委や地教委、関係諸機関等に通知し、優先的に2日間の開催日を確保し、独自の研修会等を開催しないよう依頼している。夏の上旬に静教研が3日間を優先することには難がある。行政機関等の理解を得ている現在の大会開催を継続していきたい。</p> <p>(3) 大会を開催する地域の部員の負担は増すが、そこで得られる結束力、人とのつながり、研究・研修効果は極めて高い。</p> <p>(4) 大会は、県内の教職員が一体となって講演を拜聴したり、様々な角度からの実践発表、情報交換や交流ができたりする唯一の貴重な研修の機会であることを尊重する。</p> <p>(5) 大会の運営方法等をスリム化するなど、工夫・改善を図る。</p> <p>(6) 役員や会員の大きな変動がみられる部においては、大会の準備等を含め、研究内容の充実を図る。</p>	<p>● 毎年開催する。</p> <p>(1) 研究の継続性を大切にし、大会に期待する会員の満足感にこたえ、質を高める。</p> <p>(2) 静教研は会員の自主的な研究組織であることを踏まえ、会員の資質向上につながる研究・研修の好機ととらえる。</p> <p>(3) 大会の運営方法等の工夫・改善を図る。</p>

2 地区・地域の割り振り

意見	見解	提言																																												
<p>(1) 継続する。 ア 東中西の3地区を継続する。 イ 小規模地域への配慮をする。</p> <p>(2) 変更する。 ア 会員数、学校数等を考慮し、均等になるようにする。 イ 4地区制（静東、静西、静岡市、浜松市）とする。 ウ 会員数から規模の適正化を図る。（例えば、近隣地域を統合し、1地域800人前後とする）</p>	<p>(1) 新しい地区・地域割りを検討する。 ア 従来どおり21研究部17,000人の会員数から大会開催の目安を1大会約800人として、開催・運営をする。 イ 賀茂、榛原、湖西等の会員数が少ない地域へ配慮をする。また、毎年大会を開催するとともに全国規模の大会を受け持つ静岡市、浜松市等の大規模地域にも配慮をする。 ウ 小規模地域における音楽や技術・家庭科等の少人数教員の教科研究部は、大会を開催することが難しい。 エ 静教研としての趣旨を逸脱せず会員サイドに立っての地域割り振りを考案する。 オ 地域組織体、教職員数、利便性、自主的研修組織等、様々な角度から公平性・平等性を踏まえた検討が必要である。 カ 地区・地域割り振りについて同様の問題を抱えている県校長会の「研究大会におけるブロック編成」を参考にする。「政令市を一つにする。東中西の枠組を堅持し、適正な間隔の中で各地区校長会が相応の力を発揮し開催できる」とある。静教研としては、各地区校長会を各地域に置き換え、地域会員数に配慮すれば、この考えで地区・地域割りをすることが適当である。</p>	<p>● 変更する。</p> <p>(1) 賀茂、榛原、湖西等の小規模地域に配慮しつつ、県校長会の地域を統合した新たな9ブロック（下表を参考）で、21研究部が毎年大会を開催する。</p> <p>(2) 従来どおり会員が800人で1大会を開催する考えに基づき、年度における大会開催目安を下記のように割り出した。</p> <table border="1" data-bbox="742 392 1508 750"> <thead> <tr> <th>地区</th> <th>地域</th> <th>ブロック</th> <th>会員</th> <th>大会目安</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="4">東部</td> <td>①賀茂・東豆</td> <td>東①</td> <td>876人</td> <td>1～2</td> </tr> <tr> <td>②田方・三島</td> <td>東②</td> <td>1,055人</td> <td>1～2</td> </tr> <tr> <td>③駿東・沼津</td> <td>東③</td> <td>2,087人</td> <td>2～3</td> </tr> <tr> <td>④富士</td> <td>東④</td> <td>1,511人</td> <td>1～2</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">中部</td> <td>①静岡</td> <td>中①</td> <td>2,685人</td> <td>3～4</td> </tr> <tr> <td>②志太</td> <td>中②</td> <td>1,815人</td> <td>2～3</td> </tr> <tr> <td>③榛原・小笠</td> <td>中③</td> <td>1,491人</td> <td>1～2</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">西部</td> <td>①磐周</td> <td>西①</td> <td>1,295人</td> <td>1～2</td> </tr> <tr> <td>②浜松・湖西</td> <td>西②</td> <td>3,973人</td> <td>4～5</td> </tr> </tbody> </table> <p>* 表の会員数は平成24年度の会員数である</p> <p>(3) 全国大会等が予定される研究部は、開催地域の順番が変わることがある。そのため、他研究部も変わる可能性がある。また、年度によっては、地域の大会開催目安に、1～2の変動がある。</p> <p>(4) 大会開催は、例えば、「東①」→「中②」→「西②」→「東②」→「中①」→「西①」→「東③」→「中③」→「西②」→「東④」→「中①」の11年サイクルを進める。 ア このサイクルを進めると、政令都市は11年サイクルの中で2回大会があり、他のブロックは11年に1回となる。 イ 各研究部の平成27年度以降の開催地域は、平成26年度までの開催地区・地域の順番を参考に、どのブロックから始めるかを理事会で決定する。 ウ 21研究部の開催地域を年度単位で見ると、大規模地域は多くの大会を開催することになるが、各研究部としての開催は数年に1回となる。 エ 新たに統合した地域においては、当該地域で相談の上、共同及び単独開催のどちらを選択してもよい。</p> <p>(5) 3年先の大会開催地域の決定については、今までどおり研究部代表者研修会で原案を示し、地区長を中心に調整する。</p>	地区	地域	ブロック	会員	大会目安	東部	①賀茂・東豆	東①	876人	1～2	②田方・三島	東②	1,055人	1～2	③駿東・沼津	東③	2,087人	2～3	④富士	東④	1,511人	1～2	中部	①静岡	中①	2,685人	3～4	②志太	中②	1,815人	2～3	③榛原・小笠	中③	1,491人	1～2	西部	①磐周	西①	1,295人	1～2	②浜松・湖西	西②	3,973人	4～5
地区	地域	ブロック	会員	大会目安																																										
東部	①賀茂・東豆	東①	876人	1～2																																										
	②田方・三島	東②	1,055人	1～2																																										
	③駿東・沼津	東③	2,087人	2～3																																										
	④富士	東④	1,511人	1～2																																										
中部	①静岡	中①	2,685人	3～4																																										
	②志太	中②	1,815人	2～3																																										
	③榛原・小笠	中③	1,491人	1～2																																										
西部	①磐周	西①	1,295人	1～2																																										
	②浜松・湖西	西②	3,973人	4～5																																										

Ⅲ 予算・その他について

意見	見解	提言
<p>(1) 十分な予算である。</p> <p>(2) 予算を増額する。 ア 会場使用料が高額である。 イ 講師料の増額を。 ウ 柔軟な予算運用を。 エ 予算削減の折、遠方の大会参加が難しい。 オ 成果刊行物の充実を図る。</p> <p>(3) 地域実践校及び研究助成を検討する。</p> <p>(4) 研究部委員研修会を2回にする。</p>	<p>(1) 会場使用料、講師料等の予算に関して、大半の研究部は十分との意見である。予算を越える場合は例年どおり事務局と相談をする。</p> <p>(2) 大会や研究部委員研修会への参加に関しては、例年、本会会長から県校長会長宛てに県費での出張を依頼している。旅費削減の実態を承知しつつ、会員の会費で開催する大会ゆえ、大会が他地区での開催であっても、会員の大会参加を当該校の校長の裁量で認めていただくよう今後も要望する。</p> <p>(3) 研究成果刊行事業を一層充実させる。</p> <p>(4) 地域実践校は現在9校であるが、校数の拡大や助成額の増額等の検討をする。また、研究助成は6件程度の募集を行っているが、件数の拡大や募集方法等も検討する。</p> <p>(5) 研究部委員研修会は、P D C Aサイクルで研究の成果を確認・改善・継続することを考え、例年どおり3回とする。その際、年間3回を見通した年間計画を立てるとともに、講師を招聘したり、実践発表やワークショップを行ったりして、研修の充実を図る。</p>	<p>● 予算執行は現行どおりとする。</p> <p>(1) 柔軟かつ適正な予算執行に努める。</p> <p>(2) 静教研の研修会への出張が県費で参加できるよう、今後も県校長会に働きかける。</p> <p>(3) 研究成果刊行事業の充実を図り、会費に見合う還元をする。</p> <p>(4) 地域実践校及び研究助成は、さらなる充実を目指して拡大等を検討する。</p> <p>● 研究部委員研修会は現行どおりとする。</p>